KUMAMOTO ARTPOLIS NEWS

Vol. 42　2017.3

くまもと
アートポリス
KUMAMOTO
ARTPOLIS

発行　くまもとアートポリス事務局
熊本県土木部建築住宅局建築課内

〒862-8570 熊本市中央区水前寺6-18-1
TEL.096-333-2537　FAX.096-384-9820
e-mail kenchiku@pref.kumamoto.lg.jp

アートポリスHP・FB

Contents

「平成28年熊本地震」
応急仮設住宅における
くまもとアートポリスの取組み

- 今こそ建築の真価が問われるとき
  ー伊東コミッショナーインタビューー
- シンポジウム「仮設を超えて
  ー災害公営住宅とみんなの家ー」
- くまもと型応急仮設住宅の配置計画
- 規格型「みんなの家」
- 本格型「みんなの家」全8棟
- KASEIプロジェクト、
  案内板・ロゴマークデザイン
  「みんなの家」表札、全国からの寄贈

アートポリス参加プロジェクト

- 阿蘇内牧温泉みんなの家
- 高野病院
- 熊本県総合防災航空センター

熊本地震における
アートポリスの取組み（年表）

平成28年
4月14日　前震（午後9時26分）
16日　本震（午前1時25分）
27日　「みんなの家」の整備方針を決定
熊本県応急仮設住宅整備基準を策定
29日　応急仮設住宅の工事着手

5月18日　規格型みんなの家工事着手

6月　3日　応急仮設住宅第1号が完成
17日　規格型みんなの家（談話室）第1号完成

8月17日　本格型みんなの家1棟目工事着手

10月16日　甲佐町白旗のみんなの家（集会所）完成

11月14日　応急仮設住宅4,303戸の整備完了

12月　2日　熊本型復興住宅の第1号モデル住宅完成
3日　益城町テクノのみんなの家（集会所B2）完成
3日　益城町木山のみんなの家（集会所A）完成
10日　西原村小森のみんなの家（集会所）完成
18日　南阿蘇村陽ノ丘のみんなの家（集会所）完成
23日　益城町小池島田のみんなの家（集会所）完成
本格型みんなの家8棟が全て完成

平成29年
1月14日　熊本型復興住宅の第2号モデル住宅完成
27日　小規模仮設住宅への「みんなの家」の整備を発表

2月12日　宇土市・甲佐町と災害公営住宅整備の協定締結
17日　公費で建設する「みんなの家」84棟が全て完成

3月　9日　KAPシンポジウム「仮設を越えて-災害公営住宅とみんなの家」の開催
21日　熊本型復興住宅の第3号モデル住宅完成

被災者の痛みを最小化し、日常的なコミュニケーションが生まれるよう、
熊本広域大水害などでの経験を活かして、
伊東コミッショナーからの助言を受けながら配置計画等を工夫して
「みんなの家のある仮設住宅」づくりを進める。（4/29知事記者会見）

発行者：熊本県
所　　属：建築課
発行年度：平成28年度

建築家・KAPコミッショナー
伊東 豊雄（いとう とよお）氏

●プロフィール
1941年 京城市（現ソウル）生まれ、
父の郷里の長野県で育つ
1965年 東京大学工学部建築学科卒業
1965年 菊竹清訓建築設計事務所勤務
1971年 URBOT設立
1979年 伊東豊雄建築設計事務所に名称変更
［作品］八代市立博物館、八代市立保寿寮、八代広域消防本部庁舎、せんだいメディアテーク、台湾大学社会科学部棟、みんなの森 ぎふメディアコスモ ほか

「自然に開き、人と和す」今こそ建築の真価が問われる時

2011年の東日本大震災の際に、くまもとアートポリスではコミッショナーである伊東氏からの提案を受け、仙台市宮城野区に第1号となる「みんなの家」を建設した。あれから5年、今度は熊本で2度に渡る震度7の地震が発生。地震直後の4月27日に、熊本のためにと駆けつけた伊東氏に話を聞いた。

―地震直後に熊本を訪れた際の印象はどうでしたか。

東日本大震災の時、津波で街ごとなくなった東北地方に行った後に、熊本に足を運ぶと心が和みました。こんなに自然も文化も豊かな土地なんだと再認識したことを覚えています。熊本地震も大変な状況に変わりはないけれど、幸いインフラは復旧しているし、街自体は残っている。そのおかげで前を向こうという気持ちが感じられます。

―今回の熊本地震での取組みを振り返ってみていかがですか。

20万人近くの住民が避難を余儀なくされている中、仮設住宅の建設には一刻の猶予もありません。その中で、私も4月27日には熊本県庁へ出向き、今までのプラン通りの仮設住宅の配置では2年間快適には暮らせないと、その場で住居や駐車場の配置図のラフを手描きしました。これをベースに県の住宅課・建築課でも検討してくれて、従来よりも温かみのある仮設住宅ができました。蒲島知事の「住まう被災者の方に寄り添う仮設住宅をつくりたい」という熱い想いが関係者に浸透していたように感じました。

東北では、みんなの家の建設地を探すところから難航しましたが、熊本では初めから、アートポリス事業の一環として集会施設をみんなの家として整備することで、県が主体となって取り組んだのが素晴らしい。設計から建築までほぼ同時進行のようなスケジュールで施工も大変だったと聞いています。短期決戦だったからこそ、入居者の皆さんにも、建築に関わる人や建っていく様子を間近に見ていただくことができたと思います。

―熊本での活動を通して、今後の展望をお聞かせください。

近代主義思想は、技術によって自然を征服できるというものでした。熊本が目指す創造的復興とは何か。設計者や行政が押し付けるのではなく、「一緒に考え、一緒につくる」という方向性へ建築家の思想も変化していると感じています。建物には、利用者などが入りこめる「ゆるさ」が大切です。熊本ではKASEIの活動により、若い学生が仮設住宅の環境改善に関わっています。入居者の方たちは、学生と触れ合うことで刺激にもなるし、コミュニケーションが円滑になる。学生は生活をする人たちの声を聞くことで、社会を見て寄り添う設計ができるようになる。新しい建築がここから拓かれていくのではないでしょうか。

S Y M P O S I U M

くまもとアートポリスシンポジウム

Theme **仮設を超えて** ―災害公営住宅とみんなの家―

会場となった熊本市青年会館ホールは、スピーカーを中心に周りを囲む円卓形式の配置とした。

●KAPコミッショナー・アドバイザー
伊東 豊雄 コミッショナー
桂 英昭 アドバイザー
末廣 香織 アドバイザー
曽我部 昌史 アドバイザー

●スピーカー（発表順・敬称略）
小路永 守（熊本県住宅課審議員）
田上 健一（九州大学教授）
西口 博文（益城町都市計画課審議員）
久原 英司（熊本工務店ネットワーク会長）
松舟 陽一（益城だいすきプロジェクトきままに）
内田 文雄（山口大学教授）
西山 英夫（西山英夫建築環境研究所主宰）
矢作 昌生（九州産業大学准教授）
井手 健一郎（(株)リズムデザイン代表取締役）
鷹野 敦（鹿児島大学准教授）
宮本 佳明（大阪市立大学教授）
前田 茂樹（大阪工業大学准教授）

これからの公共建築を熊本から　参加者全員で考える、意見交換型シンポジウム

仮設住宅の現状を語っていただいた甲佐町白旗団地の入居者

3月9日に、熊本地震におけるアートポリスの取組みについて、様々な立場の方々と意見交換をすることで、これから整備を進める災害公営住宅や小規模仮設団地での「みんなの家」の意義と進め方をみんなで考えることを目的としたシンポジウムを開催した。

今回のシンポジウムは、参加者全員による自由討論方式とし、仮設住宅やみんなの家の建設に関った方をはじめ、仮設住宅の入居者、学生、自治体職員など様々な参加者が集まった。

ラウンドテーブル1では、応急仮設住宅やみんなの家の整備、KASEIプロジェクトなどの取組みについて、ラウンドテーブル2では、仮設住宅の次のステップとして被災者の方々の住まいとなる災害公営住宅や、小規模仮設団地のみんなの家についてスピーカーが発表した後、自由討論へと移った。

ラウンドテーブル1では、「みんなの家」などの工事を担当した熊本工務店ネットワークの久原会長から「流通材の使用など、施工に配慮した設計をお願いしたい」との意見が出された。ラウンドテーブル2では、仮設住宅にお住まいの方から、「仮設住宅の生活では音が大きな課題。災害公営住宅では、生活時間帯の違う世帯に配慮した間取りや住戸配置が必要」との発言があり、一方で自治体職員からは、「隣人の気配が感じられることで一人暮らし世帯の異変に気付くきっかけになる」といった発言もあった。また、リビングアクセスに対する意見もあり、災害公営住宅では、プライバシーの確保と見守りを両立する工夫が必要であるという議論がなされた。その他、東北・熊本で仮設住宅を建設したプレハブメーカーの担当者、仮設団地で活動する学生などからの発言もあり、時間が足りないほど白熱した討論となったため、進行役の曽我部アドバイザーからは続編を開催したらどうかとの発言も。

最後に、伊東コミッショナーが「災害公営住宅やみんなの家をどのように建てるか、どうあるべきかを住民の方からも意見をいただいて考えられることが、アートポリス事業が30年続く熊本ゆえの大切な財産。震災を乗り越えて、これからの建築がどのような社会的存在でありうるかを考える機会でもある。」との言葉で締めくくった。

KASEIの活動に取り組む
九州大学・遠藤さんから住環境整備についての発表

「あたたかさ」と「ゆとり」と「ふれあい」のある

くまもと型応急仮設住宅

みんなの家のある
応急仮設住宅

入居者の心に寄り添うゆとりある仮設住宅で復興・復旧への気持ちをつなぐ

仮設住宅での2年間の暮らしを、より豊かにする工夫を随所に

平成28年4月14日及び同月16日の2度にわたり、震度7の地震が熊本を襲った。被災建築物の応急危険度判定や県有施設の被害状況の調査を進める中、応急仮設住宅の整備も検討されていた。アートポリスのコミッショナーである建築家・伊東豊雄氏は、出張先の海外から熊本へのメッセージを送ったのち、4月27日には被災地・熊本を訪れた。県庁で蒲島知事と面談し仮設住宅や「みんなの家」の整備への協力を表明した後、別室で仮設住宅の配置プランのスケッチが始まり、その後の110団地もの配置の基本的な考え方が定まっていった。

2日後の29日には記者発表の場で、2つの仮設住宅団地を着手することやアートポリスとの連携を知事から発表した。

木造の応急仮設住宅(阿蘇市北塚仮設団地)

コミュニティが育まれる住戸間の小路

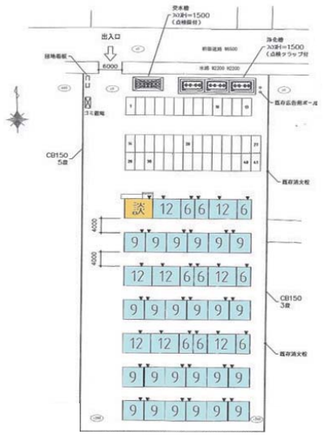
●応急仮設住宅における配置の工夫

- 従来よりもゆったりとした配置
  敷地面積：100㎡／戸 → 150㎡／戸
  隣棟間隔：4m → 6.5m（5.5m）
- 木造の集会施設（みんなの家）を中央に配置
  駐車場をできるだけ住戸に近い位置に配置
- 住棟を分節し、住棟間に小路（コミュニティ動線）を設け、木製ベンチを配置（プレハブのみ）

●住戸の配置計画経緯

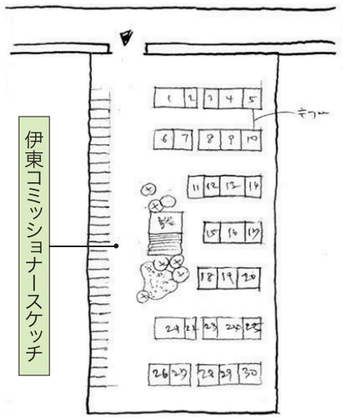
当初（業者案）

- 戸数41戸
- 建物の間隔4m



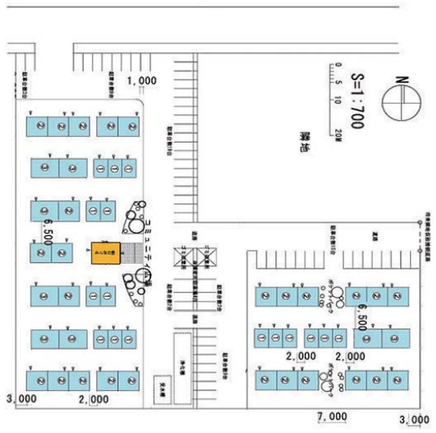
伊東コミッショナー案

- 戸数を30戸に変更
- 建物の間隔を4mから約7mに変更
- 南北に小路を設置
- 談話室を中央に配置
- 駐車場を住宅の近い位置に配置



最終案

- 戸数を50戸に変更
- 隣接地の第2～第4団地との接続に配慮して配置を変更
- 建物の間隔を6.5mに変更



応急仮設住宅の集会施設としての

「みんなの家」

「みんなの家」は、東日本大震災において、被災した方々が集い、新しい生活を回復するための拠点として伊東コミッショナーが提案し、これまで東北3県に15棟が建設※されている。第1号となる「宮城野区のみんなの家（宮城県仙台市）」は、熊本県が協力しアートポリス事業として平成23年に整備された。また、平成24年に発生した熊本広域大水害において整備された応急仮設住宅においても、阿蘇市に「みんなの家」を2棟建設した。阿蘇「みんなの家」は、平成27年に移築され公民館等として活用されている。また「宮城野区のみんなの家」は現在仮設住宅にお住まいだった方が多く暮らしている新浜地区に「新浜みんなの家」として今春新しく生まれ変わる（P14参照）。

熊本地震における応急仮設住宅団地の集会施設については、内閣府との協議により20戸以上の団地に木造の「みんなの家」として整備することとなった。仮設住宅は最終的に、110団地・4303戸が整備され（H28.11.14に全て完成）、「みんなの家」は62団地に84棟の建設を2月17日に終えた。また、20戸未満の仮設団地においても、日本財団の「わがまち基金」を活用し今後整備を進めていくことになった。

※帰心の会、NPO法人HOME-FOR-ALLによる整備

●「みんなの家」の活用事例

集まって宿題をする小学生

クリスマスパーティを開催

日本舞踊教室

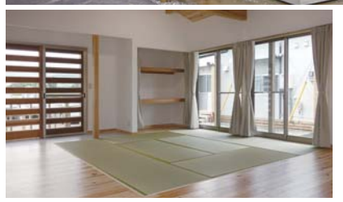
これまでの経験を活かした

規格型「みんなの家」

これまでの「みんなの家」は、入居者など使う人との意見交換を行いながら計画を進めていくこととなっていたが、応急仮設住宅の入居者にすぐに利用していただけるよう、これまでの「みんなの家」を整備した経験を活かして、伊東コミッショナーやアドバイザーが規格型「みんなの家」を設計した。「みんなの家」は県産木材や県産畳表を使った温かみのある切妻の木造建築で縁側が備えてあり、入居者の憩いの場や福祉サービスの拠点、子供たちの遊び場などに活用されている。

集会所（60㎡）

土足でも気軽に立ち寄れる広い土間を設けた内部空間。



談話室（40㎡）

様々な活動に対応できるフラットな空間。

みんなでつくるみんなの家

本格型「みんなの家」

80戸以上の大規模な仮設団地では、仮設住宅と同時期に規格型「みんなの家」を建設した後、入居者との意見交換をもとに計画する本格型「みんなの家」を8棟整備した。コミッショナーから推薦された設計者は、パースや模型で入居者に設計案を説明し、使い方や間取りなどを入居者と話しながらKASEIプロジェクトの学生（P11参照）とともに設計を進めていった。棟上げや完成の際にはみんなでお祝いし、「みんなの家」ができていく過程を一緒になって見守った。設計時から入居者の皆さんが関わることで、コミュニケーションが活性化し完成後の有効利用につながっている。

1 本格型みんなの家

屋根付きデッキや大開口を介して広場と一体で活用

甲佐町白旗のみんなの家（集会所）

甲佐町白旗仮設団地

甲佐町白旗のみんなの家は、最初の本格型みんなの家の取組みとしてスタート。新たな取組みであるKASEIとの連携をどう進めていくか、手探りしながらの計画となった。

入居者との交流イベントが広がっていったのも、この団地で流しそうめんや餅つきなどでコミュニティを形成できたことがきっかけ。

「子供の遊び場がほしい」、「みんなで料理を楽しみたい」という意見を反映し、正面を広場、背後を路地に面する屋根の下に、オープンキッチン、テーブル、座敷などが配置され、気軽に立ち寄りやすい環境が作り出されている。

左：有限会社設計室　代表取締役　**渡瀬　正記**さん

右：有限会社設計室　**永吉　歩**さん

もともと建物を建てるという行為にはハレの求心や力があると思います。入居者の方々に諮りながら「みんなの家」を計画し建てていく過程自体が、入居者の方々を励まし、仮設団地にコミュニティを生み出すきっけとなるお祭りみたいなものになりえたのではないかと思いました。

2 本格型みんなの家

仮設団地の中にとけこみ、人が繋がる。地域支え合いセンターを設け、広いテラスを持つ「みんなの家」

益城町テクノのみんなの家（集会所B2）

益城町テクノ仮設団地

熊本県内に110箇所ある仮設団地の中で、516戸と最大の益城町テクノ団地には規格型「みんなの家」が10棟建設された。11棟目として本格型「みんなの家」が12月3日に完成した。

このみんなの家は黒い外観が印象的で、最も大きい100㎡の広さだ。また、建物中央には「サクラテラス」が設けられ、シンボルツリーである桜が植樹された。テラスの西側の広々とした板張りの集会スペースに設けられた、子供の勉強コーナーは入居者の意見を取り入れたもの。テラス東側には福祉環境の充実を図るため、「地域支え合いセンター」を設置。「みんなの家」の外には芝生の庭やみんなの菜園、芝桜の花壇などの外構もつくりこまれている。これらの花壇はKASEIの学生と設計者の岡野氏が協議のうえで製作した。仮設団地内に設けられた小路はテラスにつながり、豊かな空間を作り出している。

岡野道子建築設計事務所

代表　**岡野　道子**さん

大変な生活でこそ、日常的に外に出たり、みんなが集まることが大切です。この「みんなの家」では屋外で皆さんが日常的に集まれる場所になればと、広い「サクラテラス」を作りました。室内もイベントなどができる広いスペースの中に個々の空間も設けています。この「みんなの家」が入居者の皆さんを少しでも明るくして、楽しんでもらえる場所になれば嬉しいです。

入居者の声　　**今村　文子**さん

仮設住宅の中に集会所として使える「みんなの家」は既にありましたが、キッチンまでついた立派な「みんなの家」が完成したのは嬉しいです。広いテラスもあり、散歩の途中にお友達と立ち寄って、井戸端会議に花を咲かせたりできそう。季節の行事やイベントの開催も楽しみです。

左から、山崎氏(外構アドバイザー)、岡野氏、峯社長(峯樹木園)、田邉建築住宅局長、伊東コミッショナー、ベンジャミン氏、マーク氏

桜の植樹の様子

70本の桜の樹をいただきました！

ドイツの光学機器メーカーである「カールツァイス社」から、伊東コミッショナーが代表を務めるNPO法人「HOME-FOR-ALL」をとおして、桜の樹を70本寄贈いただいた。12月4日に、カールツァイス最高財務責任者ベンジャミン・デゥブイッシュ氏、HOME-FOR-ALL代表理事の伊東コミッショナー、同理事マーク・ダイサム氏らが出席し、「みんなの家」の「サクラテラス」で贈呈式を開催。ベンジャミン氏からは「団地内に桜があれば、春には入居者のみなさんが桜に集まって花見が楽しめる。桜をとおして入居者のみなさんが交流を深めるきっかけになれば」とのご挨拶があった。寄贈いただいた桜は峯樹木園(合志市)と県内9市町村35団地に植樹し、入居者の皆さんはお花見を心待ちにされている。

桜につけられた、HOME-FOR-ALLのタグ

［西原村小森］ 仮設団地内の3つの「みんなの家」で交流も生まれる“合同”イベントを開催。

西原村小森仮設団地は、第1～第5団地が隣接した312戸の大規模な仮設団地で、第2～第4団地内に3棟の本格型「みんなの家」を整備。県内の建築家で構成した3グループが設計を担当した。

10月30日には、建設中の3棟の「みんなの家」で合同上棟式を開催。気持ちの良い秋晴れの中、餅まき会や見学会を開催し、隣接する第1団地では、お茶会や焼き芋の振る舞いもあり団地全体で盛り上がった。12月10日には多くの入居者の皆さんに集まっていただき、合同完成イベントを開催。世代を越えて集える、個性豊かな「みんなの家」が完成した。

入居者の声　平島　睦子さん

入居者の中には、車椅子や難病で移動が大変な人もいるので、各団地にひとつずつ「みんなの家」があるのはとても助かります。昼間も開けてもらって、散歩の途中に寄ったり、子どもの遊び場になったりと完成後がとても楽しみです。実際に生活する私たちの声を大切に建ててくれているのも嬉しいですね。

本格型 みんなの家 3　いつでも誰でも立ち寄れるオープン空間

西原村小森第2のみんなの家（集会所）

西原村小森第2仮設団地

「みんなで集会ができる場所を作ってほしい」「子供たちも楽しめる家がいい」等の入居者の意見を反映させた「みんなの家」は、開放的な大きな窓で外の空間とそのまま繋がる東屋のような「みんなの家」となった。建物を廻る縁側には、いつでも気軽に立ち寄り腰かけることができ、中央にはみんなで料理ができる大きなキッチンを設けており、大人数での集会やイベントもできる。みんなが集う姿を感じることができるオープンな「みんなの家」は、夜には淡い光が窓から漏れ、優しく仮設団地を照らす灯篭のよう。

（公社）日本建築家協会
九州支部熊本地域会
代表幹事
原田　展幸さん

11名のチームで設計に取り組んだ「縁側のあるみんなの家」。完成後も、実際に使っていただいた意見でさらに進化させながら、地元の建築士として末永く関わっていきたいです。

設計：（公社）日本建築家協会九州支部
熊本地域会推薦チーム
大谷一翔＋柿内毅＋堺武治＋坂本達哉＋佐藤健治＋長野聖二＋原田展幸＋深水智章＋藤本美由紀＋山下陽子／kulos＋黒岩裕樹

本格型 みんなの家 4　みんなに優しい使いやすさを追求しました

西原村小森第3のみんなの家（集会所）

西原村小森第3仮設団地

団地内で唯一店舗が隣接する小森第3団地のみんなの家は、店舗との行き来も考慮したデッキの計画により、楽に移動できるようになっている。外部から利用できるトイレは、店舗からの利用者の動線にも配慮。室内は土足のまま気軽に立ち寄れる板土間となっており、テーブルやキャスターつきの置き畳を使うことで、室内レイアウトの自由度の高さもポイントとなっている。

（一社）熊本県建築士
事務所協会青年委員会委員長
山室　昌敬さん

今回の設計には8人のチームで取り組みました。仮設団地での暮らしの中で「みんなの家」を使うことで、毎日の生活の中に楽しみを見つけてもらえたらいいなと思っています。

（一社）熊本県建築士事務所協会
会長　**福島　正継**さん

今回の「みんなの家」プロジェクトでは、当協会の青年委員会に積極的に取り組んでいただきました。震災後の対応で大変忙しい中、団地住民の方々と意見交換や短い期間での設計業務を若手建築士の皆さんが連携・協力して取り組んでいただき、住民の皆様に大変喜んでいただける「みんなの家」が完成したことに感謝したいと思います。

設計：（一社）熊本県建築士事務所協会推薦チーム
山室昌敬＋松本義勝＋梅原誠哉＋佐竹剛＋
河野志保＋本幸世＋谷口規子＋山田大介

本格型 みんなの家 5　本を読んで寛げるみんなのリビングに

西原村小森第4のみんなの家（集会所）

西原村小森第4仮設団地

「本の家」がテーマのこの「みんなの家」は、昭和女子大学のご協力により「ホンノバ・プロジェクト」で集まった本と、この「みんなの家」に合わせて同学生が製作した本棚やテーブル、県立熊本工業高校インテリア科の生徒が製作した椅子を配置。これらの家具と「みんなの家」が見事にマッチし、まるでブックカフェのような雰囲気。小上がりの和室と板間を組み合わせ、各々のスタイルで寛げる空間となっており、子どもたちが帰宅後も落ち着いて勉強できるスペースも設けている。

（公社）熊本県建築士会
青年部会
甲斐　健一さん

間接照明や調光を取り入れ、よりくつろげる環境を実現しました。仮設住宅にはリビングがないので、自宅の延長として、家族の団欒や宴会などにも気軽に利用して欲しいです。

（公社）熊本県建築士会
会長　**中尾　憲征**さん

今回の「みんなの家」の取組みは、東日本大震災に始まり、阿蘇広域大水害を経てのプロジェクトです。「自然に開き、人と和す」というアートポリスのテーマのもと、当建築士会においても青年部に積極的に取り組んでもらいました。「あたたかさ」と「ゆとり」と「ふれあい」の気持ちを大切に今後もアートポリスを進めていただきたいと思います。

設計：（公社）熊本県建築士会推薦チーム
甲斐健一＋田中章友＋丹伊田量＋
志垣孝行＋木村秀逸

本格型
みんなの家 6

ふたつの「みんなの家」が つながって、さらに伸びやかで 集いやすい空間に

益城町木山のみんなの家（集会所A）

益城町木山仮設団地

木山のみんなの家は、既に建てられていた規格型「みんなの家」に隣接した配置が特徴で、この2つの建物をL字型に配置することで、2棟のつながりを意識し、大きな空間として利用する計画としている。

「仮設住宅は狭いので、広くて大きな部屋がほしい」「子育て世帯が多く入居しているので、子供たちの遊び場所が欲しい」といった意見を取り入れ、2棟の「みんなの家」の前に子供の遊び場スペースを設けた。内部は、広々とした大きな空間を確保し、入居者の皆さんの様々な利用に配慮している。また、広場に面しても大きな縁側を設け、靴を履いたまま気軽に利用できるつくりになっている。

完成式当日には、住民参加型のワークショップで製作した木製の花壇に花も彩られ、大人や子供が集いやすい空間となっている。

左：山口大学大学院　教授　**内田　文雄**さん
右：西山英夫建築環境研究所　**西山　英夫**さん

狭い仮設住宅ではできることが限られるため、「みんなの家」は入居者の皆さんが少しでもやりたいことができる場所として、特別凝った作りではないけれど、使いやすさ馴染みやすさを意識して、丁寧に誠実に作り上げました。

入居者の声　　**小嶺　ひろ子**さん

ワークショップでは80歳以上の方たちも積極的に参加して、仮設から出るいいきっかけになりました。大きな縁側で日向ぼっこをしたり、ここで作品展をしたりと楽しみが広がります。

本格型
みんなの家 7

窓から望む風景も取り込んで 心安らぐ温かい “住み”心地を実現

益城町小池島田のみんなの家（集会所）

益城町小池島田仮設団地

小池島田のみんなの家は、最後の本格型「みんなの家」として12月23日に完成した。温かい“みんなの我が家”をコンセプトに、部屋から見える庭には植栽や西日を遮る樹木を植え、内壁には吸湿・防臭効果に優れた木炭を使用。外壁に使われたベンガラの赤がアクセントになっている。

「集会所ではなく、できる限り一般の住宅に近づけたい」と、我が家らしく玄関には靴箱を設置。畳でお茶を飲んだり、足を伸ばして寝転んだりできるようになっている。広いデッキでは腰掛けやすいようにとステップを低めにしている。

有限会社森・繁建築研究所
代表取締役　**森　繁**さん

家庭とは「家+庭」です。建物だけでなく、庭までを含めて「みんなの我が家」と考え、一般住宅のように寛げる環境づくりを目指しました。住む感覚で使いこなしていただきたいです。

入居者の声　　**片岡　礼子**さん

仮設住宅での暮らしも復興も2年以上かかるだろうし、これからの心配もあります。しかし、イベントなどができる人も集まるので、みんなで一緒に楽しく使っていきたいですね。

本格型
みんなの家 8

庇の下の大きなえんがわで みんなで囲む食卓が 日々の生活を豊かにする

南阿蘇村陽ノ丘のみんなの家（集会所）

南阿蘇村陽ノ丘仮設団地

陽ノ丘のみんなの家は、「みんなで味噌などの地域の食材を作りたい」「鍵を開けなくても集まれる場所が欲しい」といった入居者の要望をしっかり反映して作っている。

この「みんなの家」の特徴は建物幅と同じ長さの庇。雨の日や日差しが強い日も入居者の皆さんが庇の下で集い、ちょっとしたコミュニティスペースになるとともに、みんなでバーベキューなど外でご飯も楽しむことができる。建物内にはいつでも調理ができるように大きなシステムキッチンを準備。入居者の皆さんからは「庇の下は切干大根や柿などの食材も干せる多目的なスペースになる」との声も。

建物の外には、トイレを別途設置し、散歩途中の入居者や学校帰りの子供たちもいつでも気軽に使えるよう配慮している。

株式会社古森弘一建築設計事務所
代表取締役　**古森　弘一**さん

仮設での生活の中で足りないものは“ゆとり”です。広いスペース、ハイクラスなシステムキッチンといった「いいもの」を使う贅沢が、きっと気持ちの豊かさにもつながります。

入居者の声　　**早川　タエ子**さん

この「みんなの家」は、仮設団地の全戸が集まるにはちょっと狭いけど、広い台所としてはぴったり。暖かいし、キッチンは使いやすいし、やっぱりみんなで食べるご飯は美味しいですね。

KASEI

関わりが生み出す人々のつながり

若い力で仮設住宅を活性化！

「KASEI」とは「九州建築学生仮設住宅環境改善プロジェクト」の略称。仮設住宅での豊かなコミュニティの構築や、安らぎのある住環境を、「ものづくり」「ことづくり」の両面から支援するために組織され、九州・山口を中心に20の大学・高専が参加。仮設住宅の入居者や地元自治体との話合いを重ね、様々なワークショップなどを継続的に展開している。2月12日にはKASEIロゴマークをデザインした野老朝雄氏による基調講演と、2016年度の活動報告や自治体との意見交換を行い、継続的な支援に向けて活動を本格化させている。

九州大学大学院 人間環境学府
空間システム専攻 修士課程2年
林 孝之さん

KASEIの活動では、直接現地に伺うことができ、多くの出会いや経験を積むことができました。1年間の経験を活かし、今後は求められる要求と向き合い、活動を行っていきたいと思います。

表 札

高校生が復興への思いを込めた表札

県内高等学校23校の書道部員が揮ごう！

「みんなの家」に掛ける表札を、県高等学校文化連盟の協力により県内高等学校23校の書道部員に揮ごう※してもらった。また、表札の材料となる杉板（縦100㎝、横18㎝）を球磨郡湯前町から寄贈していただいた。

揮ごうした書道部員の中には被災した生徒もいて、特別な思いと復興を願う気持ちが込められた立派な表札が出来上がった。

表札の裏には被災された方への温かい応援メッセージが書かれ、表札を見た仮設団地の入居者の方々からは「見ただけで元気がでてくる」という声が寄せられた。

※揮ごう 毛筆で文字や絵をかくこと。

益城町テクノ仮設団地10棟の表札を揮ごうした第二高校、東稜高校、熊本マリスト学園の生徒

御船町西往還仮設団地「みんなの家」の表札の表と裏
（文字：第二高校書道部・絵：同美術科）

益城町木山仮設団地で表札を掛ける第一高校の生徒

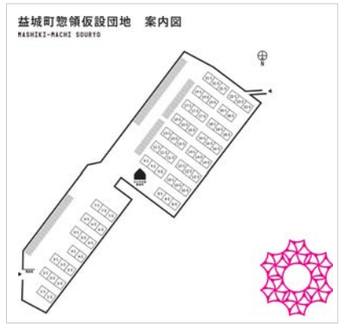
学校で表札を書きあげた翔陽高校の生徒

案内板

2020年東京五輪・パラリンピック公式エンブレムのデザイナー

「野老朝雄（ところあさお）氏」が仮設住宅の案内板をデザイン！

東京五輪・パラリンピックの公式エンブレムをデザインした、野老朝雄氏が、応急仮設住宅におけるアートポリスの「みんなの家」などの取組みに賛同し、仮設住宅の案内板とオリジナルロゴマークのデザインを手がけ、デザイナーの三星（みほし）安澄（あずみ）氏とKASEIの学生の協力で制作。



野老氏デザインの仮設住宅の案内板
（右下がオリジナルロゴマーク）

案内板は、110団地すべての仮設住宅に設置し、デザインはルールを決め、色、線の太さ、フォントを統一。「みんなの家」の目印は、家型とすることで、入居者が集まる中心的存在として温かみのある表現としている。

オリジナルロゴマークは、「人」という文字の集まりで構成され、「人と人とが手をとりあって復興を進めていこう」というメッセージを込めており、各団地のオリジナルのマークをKASEIプロジェクトの学生がシールとして作成し、案内板に貼付けていく計画としている。

KASEIの学生がロゴの趣旨を説明（九州大学薮井翔太郎さん）

昨年10月に益城町惣領仮設団地でデザイン報告会を開催（手前が野老氏）

KASEIが制作したロゴのパネル

寄贈品

全国からたくさんの寄贈品

入居者のみなさんに喜ばれています！

被災された方々のために「みんなの家」で使ってほしいと、全国からたくさんの寄贈品をいただいた。学生のみなさんが製作した椅子や中古の椅子を集めて送ってくれたもの、地元の木材で作ったテーブルやベンチなど様々な形でご支援いただいた。これらの寄贈品は84棟の「みんなの家」で大いに活用され、入居者のみなさまにとても喜ばれている。

椅子	NPO法人これからの建築を考える「伊東建築塾」 （株）インターオフィス NPO法人HOME-FOR-ALL 神奈川大学曽我部吉岡研究室 NPO法人福岡ファウンデーション （株）カンディハウス
テーブル ベンチ	水上村、多良木町
畳表	八代市、氷川町 八代地域農業協同組合 熊本県い業生産販売振興協会
冷蔵庫	（一社）熊本県測量設計コンサルタンツ協会

いただいた家具がお茶会でも大活躍！
（西原村小森第1団地）

完成プロジェクト

阿蘇内牧温泉みんなの家

Home-for-All in Aso Uchinomaki Hot Spring

ワークショップを経ていよいよ完成！地域と老人保健施設をつなぐ「みんなの家」

阿蘇内牧温泉みんなの家は、平成26年11月に開催した「アジア国際学生設計コンペティション」で最優秀賞を受賞した九州大学と延世大学(韓国)の学生と太宏設計事務所（熊本市）が設計を担当し、平成28年5月に着工、同年11月に竣工した。設計を担当した学生や卒業生が、最後まで自分たちの手で完成させたいという想いから、10月29日、30日の2日間、韓国や東京から阿蘇に集まり、足湯製作と庭の芝張りのワークショップを開催した。リハビリ室や福祉用浴室を備えたこの「みんなの家」は、医療法人社団坂梨会の介護老人保健施設愛・ライフ内牧の利用者と、地域の方との両方の利用を見据えた開放型の施設。丘の上の大きな屋根の下にみんなが集うという2つの大学の想いと、実際に施設を使う利用者やスタッフの希望も融合させた、多機能型の新しい「みんなの家」として地域に根差していくことを期待している。

- 構造・階数／木造平屋建て
- 延べ面積／199.77㎡
- 設計／土井彰人＋前田清貴＋古里さなえ＋井田久遠＋LUCIE VILLAIS＋JUWAN KIM＋TAEKMIN KIM＋DEOKHWA JEON＋HYUNGCHUL LEE＋JIEUN KIM＋太宏設計事務所
- 施工／株式会社橋本建設
- 建築主／医療法人社団坂梨会
- 竣工／2016年11月

医療法人社団　坂梨会
理事長　**坂梨　嘉壽惠**（よしすけ）さん

昨年の熊本地震により、計画の遅延が懸念されましたが、本プロジェクトの計画から設計、建築に携わっていただいた多くの方々のご協力により、ほぼ計画通りに、素晴らしい素敵な施設が無事に完成しました。心より感謝申し上げます。愛・ライフ内牧通所リハビリ別棟併設「みんなの家」は、くまもとアートポリスの対象プロジェクトです。2014年くまもとアートポリスアジア国際学生設計コンペティション「阿蘇に建つ『みんなの家』を付設する温泉リハビリテーション施設」において、多数の応募作品の中より、伊東豊雄コミッショナーが選出された「海外部門：韓国延世大学の作品」と「国内部門：九州大学の作品」の二作品を基にした新規事業であり、利用者様の増加による通所リハビリテーション施設の手狭など、年来の不満を解消すると共に、地域の皆様にご利用していただいたり、災害時の緊急避難場所として利用する「みんなの家」の機能を持ち合わせた施設になります。今後も坂梨会では、「少しでも多くご利用される方々のニーズに応え、地域貢献ができるように・・・」との強い思いで新しいことにチャレンジしつつ、皆様に信頼される存在であり続けるよう、日々努力を重ねて参ります。皆様、ご期待ください。

九州大学大学院 人間環境学府 空間システム専攻
修士課程2年　**古里　さなえ**さん

建築を学び、設計や模型製作は日ごろから行っていますが、学生では実際に建造物を建てることはできないので、貴重な経験をさせていただきました。上棟式では自分たちが引いた図面が目の前に建っていることに感動。延世大学との調整は大変でしたが、国境を越えて仲間になれたことも楽しかったです。

延世大学 修士課程 2015年卒業
金　桂完（Kim Juwan）さん

日本での建築のプロセスを実際に見ることができるいい機会になりました。学生である私たちの意見も取り入れてもらえ、病院スタッフや施工設計事務所など皆が関わって「みんなの家」の核を作っていくのだと感じました。利用する皆さんにいつでも幸せな時間を過ごしてもらえる場所になって欲しいです。

プロジェクト進捗

高野病院

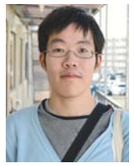
Coloproctology Center Takano Hospital

最新の免震技術を学ぶ「現場見学会」を開催

KAP初の病院プロジェクト高野病院は、3月現在外壁工事が完了し、内装工事を行っており、今夏のオープンに向けて順調に工事が進んでいる。11月2日には、KAP人材育成事業として現場見学会を開催。参加者約50名が、鉄骨が組み上がった状況と最新の免震技術を学んだ。高野病院で採用された免震装置は、これまで多く採用されているゴム系支承とは異なり、金属の球面すべり支承による免震装置が採用され、九州初、また、病院建築としては全国初となる。見学会では、設計担当の共同建築設計事務所・永野氏とコンテンポラリーズ・村野氏から設計内容が説明され、普段見学できない建物内部を見学した。免震層では、設計担当者から免震装置について詳しい説明があり、参加者は興味深く見学していた。

有限会社 風設計室
井田　啓太さん

仕事柄KAPについては普段から気にかけています。免震装置の実物も初めて見ることができ、他の方の仕事に詰まった様々な考えやアイデアに触れられるのは勉強になります。



来住　佳祐さん

過去の公開コンペやシンポジウム等にも参加したので、出来ていく過程を一市民として楽しみにしています。模型で見たものが実際に建物になっている様子は圧巻ですね。

崇城大学 工学部建築学科
3年　**園田　彩夏**さん

鉄骨建設の現場に初めて入って、その規模を知ることができました。構造も見やすかったし、授業で概念は学んでいた免震構造も実物を見るとよりわかりやすかったです。

プロジェクト進捗

熊本県総合防災航空センター

Kumamoto Disaster Prevention Aeronautical Center

防災ヘリの広域活動拠点整備が進んでいます！

平成27年8月、プロポーザルにより設計者を『小川次郎＋アトリエ・シムサ』と決定した。平成28年10月に工事に着手し、現在コンクリート壁を立ち上げているところ。平成29年10月の完成に向けて工事が進んでいる。

この建物の一番の見所は、ヘリ格納庫の上部を覆う小径の流通材を活用した木架構。県産木材の活用による木質化を推進する。

夏頃には木造の建て方工事が終わり、空港の一角で周囲の風景とともに「たたずまう」姿が待ち遠しい。

上：模型写真、下：パース

宮城県仙台市

宮城野区のみんなの家が「新浜（しんはま）みんなの家」として新しく生まれ変わります！

東日本大震災の支援プロジェクトとして整備した「宮城野区のみんなの家」が、仮設住宅の撤去に伴い移築され、震災メモリアル施設として生まれ変わることになった。設計から完成まで仮設住宅の入居者とみんなで話し合い、多くの方々の協力を得て実現したこの「みんなの家」は、建築資材をできる限り再利用し、入居者の多くが震災前に住んでいた新浜地区に移築される。名称は、移築先の地名にちなんで「新浜みんなの家」となった。場所を移して活用されることになった「みんなの家」は、復興のシンボルとして東北と熊本を繋ぐ大きな役割を果たしてくれるだろう。

写真提供：中城建設（株）